

# 萬葉に於て日本の感情を見る (五)

東京女子高等師範學校教授

石 井 庄 司

## 三、國土を稱へる

神武天皇が日向から大和へ遷都遊ばされるに就いて、御  
兄君たちや御子たちを召し集められて相談なさつた折の御  
言葉の中に

東に美ひむかしきくにあり、青山四方にめぐれり

さいふのがあります。日向國から東の方にあたつて、青々  
とした山に圍まれた美しい地がある、それはわが國の中心  
に當つてゐることも仰せられてゐます。これはわが國土を稱  
へる最も古い徵證であります。

琴歌譜さいふ古い歌謠を集めた本の中に、景行天皇がひ  
さしく日向の國においてになつて、大和の宮を慕つてお詠  
みになつたさいふ長歌を傳へてゐます。

そらみつ 大和の國は

神がらか ありが欲しき。

國がらか 住みが欲しき。

ありが欲しき國は あきつ島大和

歌の意味は、「大和の國は神様だからでせうか、ありたい

さ思ふ國であります。また國柄がよいからでせうか、住み  
たいさ思ふ國であります。住みたい國は、あきつ島大和で  
ある「さいふのであります、言葉は少々抽象的であります  
が、現世の樂土としての日本に對する讚歎の意味はよく拜  
察致されます。

また應神天皇が近江の國においてになつた時、宇遲野の  
近くに立つて、葛野を望んでお詠みになつた御製がありま  
す。

千葉の 葛野を見れば

百千足る 家庭やにはも見ゆ。

國の秀ほも見ゆ。

これは國見の行事に關係がある歌と思はれます。萬葉集  
のはじめに舒明天皇が香具山に登つて望國を遊くぐばした時の  
御製は、前にも申したことがあります、これも亦國土を  
稱へ給ふあらはれであります。その結句に「うまし國ぞ あ

きつ島大和の國は「こありませんが、景行天皇の御製の結句こも似通つたところのある調であります。よき國土を稱へ給ふ敬慮の程、全篇に溢れ、しかも蒼古さも申すべき素樸な御作であります。一度聲をあげて誦んで戴きたいと思ひます。

大和には 群山あれさ

さりよろふ 天の香具山

登り立ち 國見をすれば

國原は 煙立ち立つ

海原は かまめ立ち立つ

うまし國ぞ あきつ島 大和の國は

次に天武天皇が吉野宮に幸せる時の御製が萬葉集卷一のはじめのところに載せてありますが、まことに調子の高い御作であります。

淑人のよしこよく見てよし言ひし芳野よく見よよき人よく見つ

「よ」の音の繰りかへしが多く、誦み下してみて、歌の調の他と異つてゐるのに驚くのであります。天皇の御満足の御境地をお詠み遊ばしたのでありませうが、これもまた吉野宮のあたりの景色のよいのに因るこゝろ、思はれます。持統天皇が御一代のうちに二十數回さいふ度多く行幸遊ばされた吉野宮は如何にすぐれたものであつたか、天皇の行幸に従つた人麿の作の一つを味はつてみませう。

やすみしし わが大君の きこしをす 天の下に 國はしも さはにあれさも 山川の 清き河内を 御心を吉野の國の 花散らふ 秋津の野邊に 宮柱 太しきませば ももしきの 大宮人は 船並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆるこゝなく この山のいや高しらす 水はしる 瀧の都は 見れさ飽かぬかも 萬葉集には、これと並んでもう一首の長歌があり、それ／＼の長歌に反歌が添へてありまして、一つのましまつた作になつて居ります。

さて此の長歌の意味は、大體次のやうであります。「わが天皇陛下の御統治遊ばされる天の下に、國さいふものは澤山ありますが、山や川の清らかな河の流域にして、吉野の地の秋津野のほそりに、立派な宮殿を御造營になりますので、御殿にお仕へ申す人々は、船を並べて朝に川を渡り、舟を競つて夕に川を渡ります。そしてこの川の流の絶えないやうに絶えるこゝなく、またこの山の高いやうにいよ／＼高くいらせられます。この水の流のはやい宮處は、いくら見ても飽きないこゝであります。」

次の長歌の中には「登り立ち國見を爲せば」「さいふやうな句もありますので、人麿は行幸の御件をして、高い處から吉野宮のあたりを觀望して、この作をなしたものと思はれます。人麿の歌の中には、なんとも神秘的なところもあ

り、まだ述べ足りないやうな、少々わかり難いところもありますが、吉野宮のあたりの光景を稱揚して餘りがありません。かういふ國土を稱へる精神も結局は、天皇の大稜威のあらはれを考へられるのでありまして、まことに敬虔な心情の發露であります。さきに神武天皇の御言葉を掲げましたが、わが國土こそは、神の創めて造り給うたものであり、また神武天皇をはじめ御歴代の天皇の御經營遊ばされてきた、由緒あり尊い土地であります。さうしてこれを愛護し防護しないで居られませう。またこの美しい國土をさうして賞め稱へないで居られませう。萬葉集の中には、かういふ國土を稱へる歌が實に多いのであります。奈良時代の人々の心持の程も察せられて、ありがたく尊いことと思はれます。今日昭和の民としての私ども、また奈良人に勝ることも劣ることもない確信いたします。

かういふ國土を稱へる歌も、日本の象徴としての富士山を詠む歌によつて代表されてゐるやうな氣がします。山部赤人の富士山を詠んだ歌——田子の浦ゆ打ち出でてみれば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける——は皆様のよく承知して居られるところと思ひます。けれどもこれは赤人の富士山の歌の反歌だけであります。この長歌をぜひ讀んで戴きたいと思ひます。

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる

富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡る日の 影もかくろひ 照る月の 光も見えず 白雲も 行きはばかり 時じくぞ 雪は降りける 語り繼ぎ 言ひ繼ぎ 行かむ 富士の高嶺は

むかし天地は渾沌として何が何だかわらなかつたのです。段々上と下とに分れて、天地が開けてきたと言はれてゐます。古事記のはじめには「天地のはじめの時」といふ言葉があります。いはゆる天地開闢以來といふことであります。駿河の國にある富士の山は、その大昔から神々しく高く貴く聳えてゐるといふのでありますから、全く日本の國そのもの姿であります。その富士山のすばらしい光景を歌つて、「空を渡る太陽も姿も隠し、照る月の光も見えない。また白雲も行くのに躊躇し、時候はづれの雪が降つてゐる。」といつて居ります。この言葉の中には自然を神と見る原始的な思想も窺はれまして、まことに立派な歌であります。このやうに不思議な富士の山のことは、次々に語り傳へて行かうといふのであります。

この長歌があつて、終に反歌があるのであります。反歌といふものは概ね長歌に述べたことを要約することになつて居ります。それで、田子の浦から出てみるに、真白く富士の高嶺に雪は降つてあつたといふのでありますが、深い感激の表現となるのであります。

小倉百人一首には、「田子の浦に打出で、見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつゝ」<sup>△</sup>として出てありまして、皆様もその方が親しみをお感じになるかと思ひますが、歌の本質からしますと、餘程大きな違があることになります。和歌といふものは、一字二字の違でも大きな結果を生むことになりまして、百人一首では「田子の浦に」<sup>△</sup>とありますが、萬葉集では「田子の浦ゆ」<sup>△</sup>とあります。「ゆ」は「から」といふ意味で「に」は別であります。この助詞一つが既に大きな違を起してゐます。「白妙の」<sup>△</sup>「眞白にぞ」<sup>△</sup>も違ひます。なほ結句「雪は降りつゝ」<sup>△</sup>「雪は降りける」<sup>△</sup>も違ひます。二首比較して考へて行きますと、色々の問題がありますが、今は簡単に、萬葉集の方が勝れてゐること、その理由は、萬葉集こそ眞實の姿をそのままに述べたものであることだけ申して置きます。なほ、萬葉集の根本精神であるところの「わらへ心」<sup>△</sup>「いふところから、この問題を解釋してみるの面白いと思ひますが、すべて省略いたします。

萬葉集卷六に筑紫の太宰府の長官をして居りました大伴旅人の歌があります。京を遠く離れて九州にまで出かけたのですから、非常にさびしかつたらしいのであります。奈良時代の交通の様相から考へますと、今日ならば大陸はおろかシベリヤを越えてヨーロッパへ行く位に感じたのではないかと思はれます。太宰府で旅人の下役をしてゐた石川

足人といふ人があるとき旅人に向かつて、「あなたは、大官人の住つてゐる奈良の家を戀しくはございませんか」といふやうにたづねたのであります。するに、旅人が

やすみしゝわが大君のをす國は大和も此處も同じごぞ思ふ。

と答へたといふことあります。

「やすみしゝわが大君」といふ言葉は、前にあげた人麿の長歌の始にもありました。「わが大日本の天皇陛下」といふことでもあります。「をす」は御統治遊ばされることです。わが天皇陛下の御統治下においては何處でも同じである。草深い筑紫の果も大和も同じだと思ふといふのであります。草瘦我慢だといふやうにお思ひになる方があつても知れませんが、旅人自身は決してそんなつもりはなかつたと思ひます。それは、この歌の調がよく張りきつて居ります。まづ初から「やすみしゝわが大君のをす國は……」と讀んで來ますと、その心持がわかると思ひます。歌といふものは、言葉の概念だけではありませんで、かういふ調といふものが大事なのであります。

國土を稱へる歌がかういふ歌にもなつて來ます。これは今日、北に南に發展しようとする吾々にも非常に力強い力を與へてくれると思ひます。南洋の孤島にあつても、日の丸の旗の翻るころ、天皇陛下の御統治下にあつては東京も此處も同じと思ふの氣概がほしいものと思はれます。